【QR実践編】

英語の歌を「intake」に変えるための実践ガイド
― 荒れた教室でも機能する設計と、その背景 ―

この資料は、本文記事「🍀『英語の歌』のその先へ」を読んでくださった先生方が、「実際の授業でどう動けばよいのか」という問いに対して具体を紹介するために書いた実践用ガイドです。

英語の歌は、使い方と順番を誤ると効果が出ません。しかし、設計し直せば、教室の空気・子どもたちの心・学びの質を確実に変えていく力を持っています。

◆ よくある質問（簡易Q＆A）

現場の先生方から、特によく寄せられる質問をまとめてみました。

１）荒れているクラスでも本当に大丈夫ですか？
２）歌いたがらない生徒がいる場合は？
３）音痴・恥ずかしがり屋の子への対応は？
４）時間が取れない時は、どこを優先すべき？
５）ALTとのTTでは、どこを任せるとよい？

それをSTEP⓪からSTEP⑥として、できるだけ「正解を押し付けない」視点で回答しています。また、英語の歌を「聞いて終わり」「雰囲気づくり」で終わらせず、「思考・感情・関係性」を同時に動かす教材にするための具体的なプロセスを整理しています。

STEP⓪｜やってはいけないこと（導入前チェック）

まず、歌を入れる前に、次の状態でないかを確認してください。
・目的が 「静かにさせたい」「空気を変えたい」になっていないか
・歌詞の意味を扱わずに、いきなり歌わせようとしていないか
・「聞いて」「歌って」で終わらせようとしていないか

この状態で歌を入れると、生徒は「また先生の自己満足が始まった」と感じてしまいます。歌は“投入”するものではありません。 “扱う”教材です。

STEP①｜歌は「音」ではなく「言葉」として入れる

目的：英語の歌で「主体的に考える姿勢」をつくる。

具体プロセス
１）いきなり歌を流さない
２）曲名だけを提示し、内容を想像させる

３） １回目は「理解するため」に聞かせる
４）なぜその曲名なのか、根拠となるフレーズを挙げさせる

教室で起きること
１）騒がしさが「意味を考える沈黙」に変わる
２）歌が「思考する材料」になる

STEP②｜「そのままでは足りない」場面をつくる

目的 intake を起こす。
具体プロセス
・作者は、なぜこの表現を選んだのか
・自分が一番気になったフレーズはどこか
・日本語にすると、どう訳せるか （ここで訳詞家の訳を提示）
※ この段階では、正解・不正解を決めません。

教室で起きること
・辞書を引く前に、文脈で考えるようになる
・英語が苦手だった生徒ほど、意見を言い始める

STEP③｜すぐに歌わせない。まず「読める」状態をつくる

目的：英語の歌を「脈絡のあるストーリー」として捉えさせる。

英語の歌は途中で止まりません。 前に戻ることもありません。つまり、 英語の語順のまま頭から理解する訓練として、 非常に優れた教材です。歌おうとしない理由の多くは「恥ずかしさ」ではなく、読めない、目が歌のスピードについていかないという不安です。

具体プロセス
・ペンを使って「差し読み」を指導
・読んでいる語より２語先を指しながら読む
歌の速さで「読める」ようになると、自然に歌えるようになります。

STEP④｜歌わない。でも「声は出す」

目的 集団の同調を、安心できる形でつくる。
最初から歌わせません。
・フレーズごとに
・普通の声で
・歌のスピードで音読

＊ 教師は、「読めるようになれば、歌える」と明確に伝えます。

教室で起きること
・「歌わされる」という圧迫感がなくなる
・音読練習によって一体感が生まれる
・荒れの正体が「関係性のズレ」だったと見えてくる

STEP⑤｜「使い道」を与える（出口をつくる）

目的：今やっている活動を、将来の力と結びつける。

具体プロセス
・お気に入りのフレーズを１つ選ぶ
・それを使って「自分のこと」を表現する
・仲間と紹介し合い、コメントを返す

教室で起きること
・歌が「時間つぶし」から 自分の表現の道具に変わる

STEP⑥｜「自分版ミュージカル」にする

目的： unity（結束）を回収する。
・意味を理解したあとで、 場面をイメージし、表情や抑揚を工夫します。
・クラス全体が一つの歌声になると、 歌っているうちに自然と笑顔が生まれます。
　このとき、「このクラスでよかった」という感覚が、静かに育っていきます。

◆教師が絶対にやってはいけないこと

感情を持った人間を相手に、私たちは授業をしています。次の行為はNGです。
・「せっかく準備したのに」という表情
・ 他クラスとの比較
・「今日はやる気がないのかな」という言葉

荒れている教室ほど、 教師の感情はそのまま伝播します。また、歌は教師の気分を上げる道具ではありません。

◆ うまくいかなかった時の補足メモ

「失敗」から立て直すための視点
英語の歌は、一度うまくいかなかったからといって、向いていないと判断する必要はありません。多くの場合、次のいずれかが原因です。
・歌を入れる「目的」がずれていたSTEPの順番が前後していた。

・読み（理解）の指導を飛ばしてしまった。
・出口（使い道）が用意されていなかった。

③ 参考　実践の背景にある一冊

ここまで紹介してきた実践は、思いつきや一時的な工夫ではありません。
その背景にあるのが、次の一冊です。

『英語の歌で英語好きを育てるハヤ技30』（2000年／明治図書）

英語の歌を雰囲気づくり、ご褒美、時間調整で終わらせず、学級づくり・言語活動・心の育成にまでつなげるための実践をまとめた一冊です。刊行後、全国の先生方から、荒れていたクラスが落ち着いた、英語嫌いの生徒が前を向いた、歌の見方が変わったといった声が数多く寄せられました。

【まえがき】

まえがき

英語の歌で，英語が好きになった生徒たちがこんな感想を書いています。

●英語の授業で一番好きだったのは歌です。今年は，数え切れないくらい，いろんな歌を歌って，英語の時間が本当に楽しみでした。教科書やプリントなどをやっていて，歌に出てきた単語やフレーズなんかが出てくるとすぐに「ああ，あの歌にあったな」なんて思い出します。私は英語が得意じゃありません。読むのも遅いし，訳すのも下手です。でも，この１年で英語が大好きになりました。（３年女子）

●英語の授業では，歌いながら英語の勉強ができてしまう。それも宿題のようにやらされるのではなく，クイズのように思わず解きたくなる。だからみんな英語が好きになるんだと思う。（３年男子）

●とにかく英語の歌を毎時間歌うのが楽しみです。最初は英語の歌に全く興味がなかったけど，今はおもしろくて仕方がありません。英語はあまり好きじゃなかったのですが（すみません），今では一番好きです。それに一番点数をかせげる教科になりました。４月から40点満点で10点もあがったんですよ。（３年女子）

●歌はたくさん歌ったけど，思い出に残ったものがたくさんあるし，日常生活の中にとけ込んだものもたくさんありました。４月の初めは全くといっていいほど，速い歌を歌うことができなかった。しかし毎日歌っていると，最初に習った曲なんかは遅く感じるくらいになりました。本当に好きになるとはすごいことだと実感しています。（３年男子）

●先生とは２年生になって初めて話をした。１年での英語①（タスク中心の授業）は，「ああ，明日は英語①か……」という感じだった。でも，２年になって歌やディベートが入ってきてすごく楽しかった。もっともっと英語①があればいいのにと思った。たぶんこんな授業は他の学校にはないだろうな。

一つひとつのできごとが大切な思い出だ。先生の授業は大規模で最初はドギマギしていた。今ではもう，そのダイナミックな授業が楽しくて!!　何年経ってもこのことを覚えているんだろうな。（３年男子）

●特に勉強をしたわけでもないし，歌を中心に普通に授業を受けていたつもりだ。それなのにいつの間にか英語ができるようになっていた。１年間本当に不思議な授業だった。（３年男子）

●中嶋先生の授業は，１年，２年と受ける機会がなかなか巡ってきませんでした。友だちの噂で「どうもあの先生の教えてくれる英語はスゴイらしいぞ」と聞かされていたので，私は３年になって先生の授業を受けられると聞いたとき，本当にうれしかったです。英語③（教科書中心の授業）ではなく，英語①の授業ということで，結局本来の意味での「ナカシマ・マジック」は見られなかったわけですが，それでも英語①の授業は他の教科と比べるとズバ抜けておもしろかったです。歌ひとつとっても，その奥には意味があり，訴えるものがあり，心にズシンときました。「英語」というものは，全くの未知の世界であり，それに対した時，私たちはどうしても固くなってしまいがちです。でも先生の「英語」は，その枠を突き破って私たちに本当の「英語」を見せてくださいました。ここで習った英語を，そして先生を私は忘れません。本当にありがとうございました。私も，小説家になる夢を決して諦めずに頑張ろうと思います。（３年女子）

私と英語の歌との出逢い

私が，英語の歌と出会ったのは小学校５年生の時でした。ちょうど日本にやってきたビートルズをテレビで見た時に，私の音楽に対する興味に火がついたようです。

最初のきっかけは，「カッコいい！」でした。

しかし，ラジオでビートルズの曲を聞くたびに，いい曲だなあ，レコードを買って自分で何回も聞きたいなあ，と思うようになりました。

中学校に入った時に，英語をソノシート（薄い赤い色をしたレコード）で勉強したいからと，親にねだって電気蓄音機を買ってもらいました。次の日，370円を手に握りしめて，レコードを買いに行きました。初めて買ったレコードは，ビートルズの“Hey Jude”でした。アップル・レーベルが設立されたばかりでしたから，リンゴの色のように赤いレコードでした。それを毎日すりきれるほど聞きました。

当時は，「モンキーズ・ショー」がテレビで放映されており，人気を博していました。「モンキーズのテーマ」「恋の終列車」「素敵なバレリ」などのヒット曲に魅せられ，私はますます洋楽にひかれていきました。小遣いはすべてレコードに消えました。

深夜放送も毎日のように聞き続け，リクエストハガキを書き続けました。読んでもらうために目立とうとマンガを描く練習もしました。マンガが上手になったのはそれがきっかけでした。

友人とは，レコードを貸し借りして交友を深めました。

若かったのでしょう，洋楽を聞いていることで何か優越感のようなものを感じ，邦楽派の友人たちと張り合ったりもしました。

60年代は，ビートルズ以外にも，サイモンとガーファンクル，ローリング・ストーンズ，アニマルズ，ビージーズ，等々，きらめくようなスターが現れた時代でした。どの曲も鮮烈な思い出として残っています。

高校に入ると，洋楽を聞くだけでは物足りなくなり，自分でギターを弾くようになりました。最初，ギターのＦコードの音が出なくて，指先の感覚がなくなるほど練習をしました。きれいに音が出たときは，飛び上がるほどうれしかったことを覚えています。

弾けるようになると，友だちと一緒にサイモンとガーファンクル，ジョーン・バエズ，ボブ・ディラン，ＰＰＭなどの曲を練習して歌うようになりました。いっぱしの歌手になったつもりでした。

しかし上には上がいました。

当時，大変ギターのうまい友人がいて，高校の学園祭でたくさんの聴衆の前で歌う彼を，スターを見るような熱い眼差しで見たものです。

そして，忘れもしません。高校２年生の時に，教育実習で来られた女性の先生が，歌を中心に授業を展開されたのです。うれしい衝撃でした。授業で自分の好きな洋楽を取り上げてもらえるなんて……。

そのころ，ウッドストックと呼ばれるロック・コンサートに10万人も集まり，大きくマスコミに取り上げられていました。彼女は，そのウッドストックのコンサートの中からいくつか曲を選んで，私たちに聞かせました。歌詞が書かれたプリントを配って，順番に曲を聞いていき，最後に好きな曲を１つ選んでその感想を書くという授業でした。

今考えると，少々物足りませんが，その時はずっと探していたものがやっと見つかったような興奮を覚えたものです。授業に遊び心があるとずいぶん楽しくなるものだと，その時思いました。それほど印象が強烈でした。

高校時代は，ますます洋楽に傾倒していき，集めたレコードの数はクラスでも１，２位となるほどでした。

大学に入るとディスコ・ブームがやってきました。友人とディスコによく通いました。ラジオでディスコの曲がかかり始めると，身体がうずうずしたものです。

高校時代，大学時代を過ごした70年代。

スリー・ドッグ・ナイト，ドゥービー・ブラザーズ，ボストン，サンタナ，ＴＯＴＯ，ニルソン，オリビア・ニュートン・ジョン，Ｂ．Ｊ．トーマス，ドン・マクリーン，アルバート・ハモンド，イメージ・チェンジをしてディスコ・ブームに火を付けたビージーズ，ＫＣ＆サンシャイン・バンド等々，個性的な歌手やグループが生まれました。

私の青春時代は洋楽と共にあったと言っても過言ではありません。

授業で英語の歌を使うようになったきっかけ

そんなふうに，ずっと洋楽漬けの私でしたが，教職に就いてからは，パタッと音楽を聞く機会が減りました。今振り返ってみると，気持ちに余裕がなかったからだと思います。

私は，埼玉県の吉川町（現吉川市）で教師になりました。最初は３年の所属（副担）ということもあり，とにかく生徒に力をつけなければと，教科書の中の英文を理解させるのに必死でした。

いわゆる受験指導一辺倒だったのです。

ちょうど，全国の学校が荒れていた時代でした。私の勤務校も例外ではありませんでした。私が，テストのための学習に力を入れれば入れるほど，成績の二極化が進み，私の指導に不満をもつ子どもたちの心がすさんでいきました。だんだんと授業がうまくいかなくなっていき，悩む日々が続きました。

それに比例するように，生徒たちの問題行動も増えていきました。トイレでの喫煙，チェーンと木刀を持って20人で隣の学校をしめにいく，シンナー入りの空き缶を口にくわえてふらふら自転車で廊下を走る，教室にラジカセを持ち込み授業中に音楽をかけて踊る，消火器が廊下にばらまかれる，イタズラで非常ベルが鳴らされるといったことが日常茶飯事でした。

帰宅も毎晩遅くなり，身も心も疲れきっていました。朝起きると学校に行くのがおっくうになり，年休を取ろうかどうしようか，ためらうような日々が続きました。それでも勇気を出して学校に行くと，学年教師８人のうち５人が年休を取っており，学年主任と２人で青くなったこともありました。

そんなある日，１人の男子生徒がビリー・ジョエルの「オネスティ」のレコードを持ってきました。授業でやってくれないかと言うのです。

その曲は，ちょうどその時，テレビのコマーシャル・ソングとして使われていました。

どうせ授業をしても聞いてくれないのだから，気分転換にでもと思って使ってみました。するとどうでしょう。今まで私の説明に，背を向け，おしゃべりをしていた子どもたちの目がきらきらと輝いて，歌詞を必死に追いかけているではありませんか。私は自分の目を疑いました。しかも，彼らは授業が終わった後「この曲を次の授業で歌わせてよ」「この歌の意味を教えて」と口々に言ったのです。

ショックでした。今まで自分が一生懸命やっていると思っていたのは，結局自己満足だったのです。知識を教え込んでいるだけで，子どもたちが本当に必要としていることではないということがわかりました。同時に，子どもたちは，自分がいいと思ったもの，知りたいと思ったことに対しては，抑えきれないくらいの知的好奇心をもつということがわかったのです。

私の目が醒めました。

小さい時から聞いてきた英語の歌が，授業でも使えるとわかったときの驚きと喜びは例えようもありませんでした。早速試行錯誤で英語の歌を取り入れてみました。「マイ・ライフ」「デイ・ドリーム・ビリーバー」「ダンシング・クイーン」等々。ただ，自分の好きな曲，生徒の持ってくる曲が中心で，ほとんどは思いつきでした。

次の年からは，どうせなら英語の歌で文法も一緒に教えようと考えました。聞き取り，読み取りなど，いろんなアクティビティにも挑戦してみました。

曲の紹介も工夫するようになりました。子どもたちが，日に日に英語の授業に意欲的になるのが，手に取るようにわかりました。

３年後には年間指導計画をつくりました。こうして20年間，私の授業に英語の歌はなくてはならないものとなったのです。

英語の歌は英語学習の土台づくり

私は，学習には３つの要素が必要だと考えています。

１つめは，「**居心地のよい集団づくり**」です。

居心地をよくするには，違い(diversity)が大切にされなければなりません。集団の中で，子どもたち同士が関わり合い(connect)，そこから生まれた気づきを分かち合うよう(share)にすることが重要です。授業では「認め合い，学び合い，助け合う人間関係づくり」が基本になります。

同時に，授業では，教師から学習させられるのではなく，自分から学習したくなるような仕掛けと布石が必要です。自ら学びたくなるような授業をするには，教師の力量を高めるしか方法はありません。テクニックだけでは授業はうまくなりません。授業マネージメント（生徒の心理を学ぶ，問い掛けを工夫する，教材発掘の目を養うといったスキル）を磨かなければなりません。テクニックをスキル（熟練した技）にして，初めて生徒たちは英語を好きになっていきます。

その具体を『**英語好きにする授業マネージメント30の技**』（明治図書，2000）と『**学習集団をエンパワーする30の技**』(明治図書，2000)の中で述べました。

教師が，まず生徒をひきつける人間になることが大切です。

ただ，人間性だけでは生徒はついてきません。やはり，生徒たちをきちんとできるようにすることが大切です。

そこで，前者では教師の視点を変えるために「授業を生き生きとさせる原理」に始まり，「英語の授業が好きになる原理」「教師のビジョンの持ち方」「力量の高め方」「各校オリジナルなＢタイプ・シラバス（統合的な学習・infusion integration）をつくること」「教室での学習規律」「発問の仕方」などについて提案しました。

また，後者では生徒の力をつける具体的な手段として「学習集団の育て方」「聞く・話す力のつけ方」「話題を発展させる方法」「どんどん書けるようになる方法」「長文が好きになる方法」などについて詳しくご紹介しました。

２つめは，「**論理性を高めること**」です。

最近の生徒が，キレやすいのは，彼らが行間が読み取れなくなってきており，大人や友だちの心情が汲み取れないためだと私は考えています。

家庭では，子どもは望むものを与えられ，我慢するということが少なくなってきています。

大人のモラルの欠如も大きな影響を与えています。授業参観や保護者会などで大声で私語をする親，保護者会や会議などで携帯電話が鳴るとその場で話し出す親，学校説明会や三者面談でガムを噛みながら話を聞いている親。万引きをした生徒を引き取りに行くと，後から悠然と現れて「お金を払えばいいんでしょ。うちの子だけじゃないわよ。まったく」と言う親。いじめた子どもの家に家庭訪問をすると，「もっと大らかに見てくれないか」と平然と言う親。

そこには自己責任のかけらも見られません。こんな親の背中を毎日見せら

れている子どもは，どうなるのでしょう。自己中心的な親が，子どもたちと円滑にコミュニケーションを図れるでしょうか。

ストレスのはけ口が少ないことも子どもたちが迷走する大きな要因です。

遊ぶ場所が少なく，互いのコミュニケーションを必要としないようなテレビ・ゲームやパソコンのゲームなどが遊びの主流になっています。

このように，地域や家庭でコミュニケーション不足になるのであれば，学校でこそ互いを関わらせ，振り返りの時間をとり，シェアリング（分かち合う）をすることが必要になります。

しかし，学校の指導にも大きな問題があるようです。

違いを大切にして意見を拮抗させると時間がかかるので，むしろ能率よくするために同じ答えを覚えさせているのが現状です。そこでは相手にわかるように「論理的に書く，論理的に話す」という指導がおざなりにされています。

こういう要因が絡み合って，子どもたちは相手の言っていることを聞こうとしないし，話の内容にも興味がもてなくなってきているのだと思います。

その結果，相手のことがなかなか理解できないので，自分と違っていたら，ムカツクだけなのです。

私は『**英語のディベート授業30の技**』（明治図書，1997）の中で，論理的に書く，話すことの大切さ，そして違いをつくり出す場面の必要性（opinion gapからconflict resolutionへ）を述べ，その具体的な指導方法を提案しました。

論理的に書く，話すことは，訓練次第でできるようになるからです。

学校現場においては，もっと筋道を立てて考える，具体的に論拠を示す，という指導が必要であると痛感します。

そして３つめは，「**感性を育むこと**」です。

感性は全ての学力の基礎になります。

理性や論理性だけでは，コミュニケーションが円滑にいきません。何か冷たい印象を与えてしまいます。感性を育む指導が土台にあってこそ，論理性が力を発揮します。

本書のテーマである「英語の歌の指導と文集づくり」は，感性を育む部分です。そして，これは私の教材観に関わる部分です。

残念ながら，現場では「どう教えるか」という方法だけに目がいきがちな教師が，まだまだ多いような気がします。しかし，教材（何を教えるか）こそが大切なのであり，それが生徒の意欲や知的好奇心を育むと言っても過言ではありません。

そのためには，日頃から，頭からこうだと説明する演繹的な指導ではなく，気づきを生むような帰納的な指導を心がけることが大切です。

書いてあることも，話すことも，内容がなければ人は関心をもちません。

内容があれば，子どもたちの関心が高まり，もっと知りたい，読みたい，聞きたい，書きたい，話したいと願うようになります。

私は，心を育む指導として，毎年ハードカバーの卒業文集をつくっています。それが中学校３年間のゴールです。共感し合える友だちの意見や作品は，仲間や後輩たちにとって優れた教材となるからです。

よい教材に仕上げるためには，どの時期にどんな力をどんな方法でつければ有効かを，教師の方で見通しておく必要があります。

そこで，最後のゴールを設定したら，それに向けて２学期にどんな力をつけるか，１学期には何をしておくかというように逆に計画を立てます。Backward planningです。こうすると，全体像が見えやすくなります。

私がShow and Tell，ドラマ，ディベート，詩づくり，創作童話づくり，英字新聞づくりなどをしているのは，最後の文集をよりよいものにするために仕掛けられた布石です。

そして，英語の歌は全ての活動の土台をつくっています。歌は，子どもたちの作品づくりになくてはならない優れた教材なのです。

ですから，文法事項や子どもの発達段階，学期の始まり，夏休みやクリスマスなどの時期をふまえた３年間のシラバスを立てます。また，歌の内容とその持ち味を生かすアクティビティも工夫するようにします。

そうすれば，子どもたちの感性が豊かになると共に，その知的好奇心も高まるからです。

このようなスタンスを，生徒たちはどうとらえているのでしょうか。

私はここ７年間連続して３年生を担当しています。毎年初めて出会う３年生たちが，最後の授業で書いてくれた感想をいくつかご紹介します。

●中嶋先生の授業は楽しくて，魔力（笑）みたいなのが働いて，頭に「糖分」をくれるようだったです。とてもすっきり！　楽しかったです。高校に行っても先生とやりたいなあ，というか「連れていきたい」なあ（笑）。それほど大好きでした。昔の英語の時間はやたら長くてずっと遊んでいて，点数も最低（笑）だったのに，今はもっと長くやりたい気分です。さすが中嶋マジック!!　他の先生と違う授業体制がとても好きでした。（K. S.）

●あっという間に終わっちゃった。文法とか，いつの間に全部終わったんだろう，といった感じ。歌とかいっぱい歌えて楽しかった。いい歌にたくさん出会えてうれしかった。先生の話もいつも楽しかったし，授業だけでなく，人生について大切なこともいっぱい語ってくださって，いつもためになった。先生の授業を受けてわかったことは，英語は「勉強」なんかじゃなくて，「ことば」だということ。教科書の紙面を埋めるための単語の羅列じゃなくて，単語は一つひとつ生きているんだということを肌で感じた。生きていることばで，世界中の人たちとお喋りできたらどんなに素敵だろうって思えた。（M. K.）

●正直言って，最初は「本当に力がつくのかなぁ」と不安でした。シャドーイングとか「なんのこっちゃ」と思っていたけど，スラッシュを初めて教えてもらった時は，本当にびっくりしました。その時に初めて確信したんです。「この先生についていけば大丈夫だ」と。長文が好きになったのは先生のおかげです。昔は長文を見るだけでいやになっていたけど，今は長文が大・大・大好きです。こんな風になるとは思ってもみなかったので，ホントにビックリです。（S. N.）

●すごく頭に入った。学力テスト（40点満点）で初め20点だったのが31点とか，すごく伸びていったのですごくうれしかった。自分は前よりも授業を必死でうけるようになったけど，それほど勉強しなくても（というか全くしなくても）いい点がとれた。（S. T.）

●１年間は早かった。初めは中嶋先生が怖くて，今日はどんなことをするんだろう，と少しおびえていたけど，先生の授業はすっごく楽しくて，楽しくて，いつの間にか私の一番好きな教科になっていた。

厳しさも多少あったけど，それは私たちの英語力アップのためだった。そして，私たちはいつしか「英語を勉強する」のではなく，「コミュニケーションをする」という楽しい形で学んでいるのに気づいた。先生はいつも楽しく，そして厳しくよい先生だった。私はそんな先生も英語も大好きです。（N. A.）

●先生の噂は先輩からよく聞きました。がんび紙に書かせるとか。それを聞いたとき，怖いなと思いました。そして，３年になって，先生に教えていただくようになって，「英語が最後にはわかるようになる」というようなことをおっしゃったときに，内心「本当かよー」と疑っていました。本当に信じられなかったからです。でも，実際やってみて，あれは本当だったんだとわかりました。歌をたくさん歌ったり，豆を使ったり……わけわからなく，楽しくやっていく中で力がどんどんついて，英語苦手人間だった私が，今では英語大好き人間になりました。違う学校の友だちに，私がやっていることを見て「何してるの？」と不思議がられたりしました。でも，中嶋先生の方法が他にあるものではないことがなぜかうれしかったです。（H. T.）

●１，２年の時の英語の授業は教えていただく，学ぶということが大きくて他の教科と考え方は同じでした。でも３年生になってからは，こ

の２つも十分あったけど，「楽しむ」ということばが英語の授業に出てくるようになりました。歌は音楽の授業なみに歌うことができるようになって，英語の曲を覚えるのはうれしかったし，今までなかった映画鑑賞が何回か学校でできるようになって，得した気分でした。

英語を通して，他の国々の状況を知ることができたことにもすごく影響を受けました。高校に入ってからは，中嶋先生の授業を受けられないと思うと，とても悲しいです。（T. Y.）

本書の構成について

本書の構成は次のようになっています。

１章は，英語の歌で力をつける方法が中心です。

歌を，単に授業のアクセントや息抜きとして使うだけではもったいないです。やり方次第では，音読，聞き取り，読み取り，スピーチの力をつけること，そして感性を育てることが可能です。ここでは，それぞれのタスクのつくり方をご紹介しました。

２章では，生徒たちが英語をみるみる好きになっていく「歌のおもしろ活用法」を中心にご紹介しています。

３章では，年間指導計画のたて方，歌詞をデータ化すること，歌のリソースの入手方法について具体的にご紹介しています。

４章では，歌を自己表現まで高める指導として，本校のプロジェクトである卒業文集づくりを紹介しました。また，文集づくりをとおして，「相手に伝わるように書ける（話せる）」ようになるには，どう指導すればよいかを具体的にご紹介しました。

子どもたちの作品をバージョン・アップするのに，教師がどう関わればいいかということです。

講演やワークショップで，生徒の作品をご紹介すると一様に驚かれます。

感性が豊かであることもそうですが，アイデアが豊富なこと，繰り返し，読者への問いかけなどが工夫されているからです。

実は指導の仕方にコツがあります。

今回，それについて詳しく述べました。みなさんのクラスでも，実際に追試をされると心が動く作品がつくれるようになると信じています。

また，卒業文集が，なぜ子どもたちや保護者の方々の絶大な支持を得るのか，また力をつけるのかについて分析し，考察を加えてみました。

１章から４章までとおして読まれると，歌を土台に「学びの磁界」（統合的な学習）をどうつくればいいか，そのイメージがわかっていただけるのではないかと思います。

最後に，私の部屋に貼ってある１枚のgreeting cardをご紹介します。

一昨年カナダで見つけました。こう書いてあります。

It isn't the mountains ahead that wear you out.
It's the grain of sand in your shoe.

そのまま訳すと「あなたを疲れさせているのは目の前の山ではなく，あなたの靴の中の砂なのですよ」という意味になります。しかし，これは「むずかしいのではなく，あなたにその気がないだけなのですよ」と置き換えられないでしょうか。

「本気」になれば，誰でもできます。

この本をお読みになられた読者の方が，「よし，自分もやってみよう」とお考えになられたなら，こんなにうれしいことはありません。

2000年４月

著者記す

【目次】

●目　次●

まえがき　4

第１章
「英語の歌」で力をつける！

1．歌は格好の音読教材－歌えるようにするコツ－ …… 23
(1)　なぜ歌えないのか　23
(2)　音読できない歌は歌えない　24
(3)　Phonicsとタイアップする　31
(4)　意味を考えながら歌い，筆写する　32
(5)　教師が日本語の訳でリードする　33
2．「聞き取り」はどの子も挑戦したくなる …… 34
－体感できるようにするコツ－
(1)　「聞き取り」で集中させるコツ　35
(2)　カードを使って遊び感覚で　38
(3)　チャレンジングな「聞き取り」のタスク　39
3．「読み取り」は英語の歌の醍醐味
－読み取りのタスクをつくるコツ－ …… 40
(1)　「エポニーとアイボリー」は何のこと？　42
(2)　「カントリー・ロード」の主人公はどこにいる？　43
(3)　「この素晴らしき世界」は何が素晴らしいのか？　46
(4)　「トゥルー・カラーズ」はなぜ複数形なのか？　48
(5)　「素敵な16才」の２人はこれからどこへ行く？　49
(6)　「ソウ・マッチ・イン・ラブ」の“I do”とは何をするのか？　51
(7)　辞書を使って異文化に関する単語を調べよう　52
(8)　自学の力を育てる「読み取り」のタスク　54
4．英語の歌を自己表現や「スピーチ」の題材に …… 56
(1)　歌詞を変えて深まりのある自己表現を　56
(2)　コンピュータ室でスピーチ大会　58

5．英語の歌を「テスト」に出題する …… 65
(1)　遊び心のイントロあてクイズ　66
(2)　穴埋め問題をつくるコツ　66
(3)　初めての曲を聞き取ろう　68
(4)　一番好きな曲を選び，具体的にその理由を書こう　68
(5)　一番好きな曲を選び，ＤＪになったつもりで紹介しよう　69
(6)　３曲選んで，覚えているスタンザを英語で書こう　70
6．感性を育てる決め手は歌を訳す体験 …… 71

第２章
「英語の歌」で英語が好きになる！
－授業を活性化する楽しい仕掛け－

1．Opening songとClosing songで授業がピタッと決まる …… 74
2．「オール・リクエスト・アワー」を計画しよう …… 76
3．教師仲間の思い出の曲を特集する …… 81
4．ビデオ・クリップで楽しもう …… 84
5．“We Are the World”，“Heal the World”のビデオを使って …… 85
6．明日は「カラオケ大会」 …… 88
7．「カラオケ・パフォーマンス」をビデオに撮ろう …… 90
8．ＡＬＴが校内放送の人気ＤＪになった！ …… 91
9．ポスターを使った特設の時間 …… 93
10．困ったときはビートルズ！ …… 94
11．「今月の歌」からの脱皮 …… 95
12．10分テープを利用しよう …… 95
13．ＭＤは英語の授業を変える！ …… 96
14．教科書が変われば教師も変わる …… 97
15．夏休み前の“Fun Fun Time” …… 98
16．クリスマスは特別番組で …… 99
17．グローバルなトピックは知的好奇心を高める …… 102

第３章
歌のシラバスをつくろう

1．全ては年間指導計画づくりからスタートする …… 104
(1)　これが３年間のシラバスだ　104
(2)　英語の歌の冊子をつくっている学校　112
2．歌にも不易と流行がある …… 115
3．歌詞をデータ化しよう …… 115
4．歌のリソースはどこから？ …… 116
(1)　生徒のリクエストを生かす　116
(2)　同僚や保護者からアンケートをとる　116
(3)　ＣＤショップの店主と仲良くなる　117
(4)　ラジオ番組やテレビ番組を利用する　118
(5)　音楽雑誌を利用する　118
(6)　インターネットを利用する　119

第４章
心が動く教材をつくる
－歌の指導を発展させて－

1．なぜ卒業文集（詩集）をつくるのか？ …… 122
2．私の文集変遷史 …… 127
(1)　1981年秋。すべてはそこから始まった　127
(2)　生きた小学校での経験　128
(3)　夢の実現に向けて　128
(4)　私を変えた作品　129
(5)　ある編集長のつぶやき（スタイルの変更）　132
(6)　テーマ・パークのように　135
(7)　文集づくりは教材づくり　138

【コラム】ハード・カバーの卒業文集を読み解く　中村智子　140

3．学校中が詩でいっぱい …… 146
4．語感を育むために …… 148
5．作品をバージョン・アップさせるコツ …… 152
6．読み手の立場になる …… 164
(1)　人はどんな時に読みたくなるのか　164
(2)　保護者の視点から学ぶ　164
7．聞き手の立場になる …… 168
8．こだわりをつくるコツ …… 170
9．なぜ子どもたちは文集づくりを支持するのか …… 175
10．生徒の作品を教材にする …… 178

あとがき　210

おわりに

本文記事では、「なぜ英語の歌が効くのか」を、このQR実践編では、「どうすれば機能するのか」を紹介しました。英語の歌は、私の旧友である北原延晃氏、田尻悟郎氏、久保野雅史氏も熱心に英語の歌の指導に取り組まれました。それについては、カラオケ盤つきの『授業で使える英語の歌30（正続）』（開隆堂出版）をご覧ください。

英語の歌は、正しく設計すれば、教室を静かに、しかし確実に変えていきます。